矢澤洋爾の Photo Essay

8：貧は士の常なり

平成 19 年王位戦最終局

プロの将棋の終局の場面から、勝った方をアマが持ち、負けた方をプロが持って再開するという趣向のテレビ番組がある。当然アマはなかなか勝てない訳で、プロにとっては決定的な差がアマにとっては微差でしかないことが実感される。投了図の局面で先手後手の優劣を正確に判定できればアマでもかなり強い方と言えるだろう。

そういう場合の判断に私は一つの法則を発見した。持ち駒の少ない方が勝ち、というものだ。

将棋のプロは序盤における駒損を極端に嫌う。しかし終盤になれば駒の損得に気を使う棋士はいない。最終目的である「王様を詰ます」ために必要最小限の駒があるかどうか、それが唯一の関心事だ。条件が満たされれば一気に勝負に出る。だから終局の時に駒があり余っていることは普通はあり得ない。不利を悟った側が一か八かの勝負に出て結局届かなかった場合を除いて。

これは人生に対する喩えとしても実に教訓的ではないか。お金を粗末にするのは決して良いことではない。特に若い頃はお金の有難みを感じるべきだ。しかし言うまでもなくお金はそれ自体が目的ではなく、何かを実現するための手段でしかない。目的を達するために十分な条件がそろえばその時点で手段は意味を失う。

ただ、問題は人生の目的が将棋の時ほど単純でもなければ明確でもないことである。目的を明確に意識させるために江戸時代の武士は「武士道」というものを子弟に教え込んだのではないだろうか。

貧は士の常なり。中国は列子の言葉である。人生の目的を明確に自覚した時点で人は「士」になるのかも知れない。列子の言葉は以下「死は人の終なり。常におりて終を得る。何を憂うべきや」と続く。

(2007.10.9)